

## 16世紀の気候と“当社神幸記”に現われたる明海の記事\*

荒川 秀俊\*\*

## 1. 序論

著者は1962年6月16日から24日まで米国コロラド州アスペンにおいて開かれた“11世紀と16世紀の気候に関する会議”に出席した。この会議には、11カ国から、気象学、地理学、地質学、生物学、歴史学および人類学関係の専門家40名ほどが集まって、興味ある2つの世紀の気候について検討した。この会議には日本からは筆者のほか、渡辺直経（東大人類学教室）、関口武（東京教育大地理学教室）が招請されて出席した。その結果はいずれ何等かの専門誌に発表されるであろうが、16世紀については、北半球の温帯地方は概して現在より冷たかったと結論された。

しかるに、現在まで日本では16世紀は暖かかったとする人々（西岡秀雄著“寒暖の歴史”第四章）がある。その主張する最大の根拠は“当社神幸記”にあらわれた永正4年（1507）暮から永正12年（1515）春まで前後8年の冬にわたって、諏訪湖にいわゆる御神渡がなく、明海であり、したがって暖冬であったことのみに基づいて、16世紀は暖かかったとしている。もう一つの根拠として年輪の解析結果も引用されているが、日本における年輪の研究が気候の指標となり得るか、どうかは、大いに議論のあるところである。

## 2. “当社神幸記”と“妙法寺記”の史料価値

“当社神幸記”は諏訪史料叢書巻十七や“信濃史料叢書”に載っているが、これは諏訪神社上社関係の記録であって、諏訪湖の結氷と御神渡に関する記事を取載している。このうち寛文（1660年代）から天和元年（1681）までは年々書き継いだものようであるが、その前の嘉吉3年（1443）から寛文までは諏訪頼隆が上社大祝家に伝わった史料を編集大成したものの如くにいられている。

一方“妙法寺記”は“甲斐妙法寺年録”ともいい、山梨県都留郡木立村の日蓮宗道場・妙法寺の記録で、住僧たちが書き継いだものといわれている。この記録は、すでに塙保己一の“続群書類従”雑部にも集載されている

\* Severe Winters in the 16th Century

\*\* Hidetoshi Arakawa 気象研究所

—1963年8月7日受理—

し、“続史籍集覽”にも載っている。文正元年（1466）から永祿四年（1561）まで、ほぼ一世紀におよぶ甲斐国付近の政治、争乱をはじめ、天災や米価など興味ある記事でみだされている。

妙法寺は、所謂フジョシダの付近にあり、富士の北麓に位置し、付近に富士五湖があり、諏訪湖と同じく厳冬には結氷するのである。

私は信州諏訪関係の“当社神幸記”と甲州の“妙法寺記”とを比較しつつ、論をすすめたい。

## 3. 永正の暖冬記事は果して真か

さて私は“当社神幸記”そのものの真实性を全面的に斥けるわけではないが、永正の暖冬記事は大いに疑うものである。永正の暖冬記事については、“当社神幸記”には、永正十二年の条の余白に

永正四年丁卯ヨリ甲戌（永正十一年）ノ年マテ御渡依無之不能注進候。

とある。これをみると明らかに“当社神幸記”は後になって、まとめて集いたものようである。9年間にわたる記事をまとめて書いたのは、“神幸記”の編集者（諏訪頼隆）が御神渡に関する8年間の文書を見つけなかったため、簡単に御神渡がなかったと書いたものではあるまいか。

永正暖冬について、“当社神幸記”にはこれ以外の記事がない。即ち御神渡がなかったと書いてあるだけで、明海だったと書いてあるわけでもない。永正三年十二月の御渡の記事から、永正十二年十一月の御渡の記事まで飛んでいるわけで、その間は暖冬が続いたという証拠がないように思われる。いまこの年代の“妙法寺記”の気候の記事を続群書類従本によって挙げて見ると、次のようになる。

（永正元年）此年富士山ニ、六月七月両月ニ雪五度降ル。作毛ヒニ皆損大ヒテリ。ウロノ水ヲ弥宜殿下リテ氷ヲヒラカレ申候カ四五日不解。其日雨降ル。武州ニ兎多ハヤリ出テ屋孕ノ女ヲ食殺而、其処ノ時ノ食物ヲ喰。猫ヲ兎皆々喰コロス。此年大雪四尺降。……此年、冬寒キ事、右及言説。此海少モアク処無シ。大飢饉、百分千分言説不及。人馬死ル事無限。

(永正三年) 此年、冬雪不降。暖ナル事先代ニモ加様  
成事無之。湖モ不氷。

(永正五年) 大雨頻ニ而、作毛言語同断悪シ。

(永正七年) 去年極月廿五日ヨリ大雪降、深サ四尺。  
鹿死事云ニ不及。

(永正八年) 此年大風二三度吹テ、十分ノ富貴四分三  
分ニ成ル。国々大水八月出テ耕作損事無限。言語  
同断也。

(永正九年) 三月十八十九日雪両日降積事四尺。通路  
悉トマル。

(永正十一年) 世間暖ナル事申不及。霜月、輝月、雪  
不降。冬中一二度降レトモ、一寸二寸ヨリ厚ハ不  
降。

(永正十二年) 此年八月十二日ノ夜ヨリ雪日大雨ト  
雪ト同心ニ降ニ依テ、大地殊ノ外ニ氷テ、芋モホ  
リエス。菜ナトモ一本モ取ル間モ無シ。サシ置ニ  
依テ菜モ徒ラニスル。芋モ如此致候間、中々言  
語道断、飢饉ト成也。地下ノ歎ノ事無申許。此年  
ハ耕作田島粟稗惣テ造ル程ノ物ハ何も悪シ。飢饉  
ス。寒事前々ニモ過タリ。

(永正十四年) 此年、極月十五日ヨリ三日雨ニテ、前  
後雪降積リ、己上四尺五寸降ル。鳥獸自喰物ナキ  
ニ依テ皆々餓死ス。言語道断、深雪ニテ四方路次、  
悉フサカル。

(永正十五年) 此年七月十三日大風吹テ作毛悉損ス。  
諸作悪シ。其年ノ八月廿六日夜大霜降テ、明日日  
迄キエス。世間ツマル事無限。

この抜書によると永正三年と永正十一年とは暖冬で、  
富士五湖も結氷しなかったようで、諏訪湖も明海であ  
ったと思われるが、その他の年が異常暖冬であったと思  
えないのである。

#### 4. 天文四、五年の記事について

天文四、五年についても“当社神幸記”と“妙法寺  
記”の記事にちがいがあつた。 “妙法寺記”によれば、

(天文四年) 此年正月ヨリ暄(暖と同義)気ニ御座候。

(天文五年) 此年正月暖気ニ御座候。

(天文六年) 此年正月暄(暖と同義)ニ候。

とある。しかるに“神幸記”にあつては、天文四年十一  
月十七日(1935年12月21日)諏訪湖結氷、同十九日(12  
月23日)御神渡があつたとして、天正四/五年の冬は寒か  
つたように受取られ、また天文五年十二月十五日(1536  
年2月5日)諏訪湖結氷、同十八日(2月8日)御神渡  
があつたとしていて、天文五/六年の冬が暖かだつたよ  
うに受取られるのである。

注記するが、16世紀における諏訪湖の結氷日の平均は  
1月7.8日である。

因みに“当社神幸記”や“妙法寺記”によると、冬と  
いう記事が、その年の正月ごろの冬であるのか、または  
その年の12月ごろの冬であるのか、判断できない年もあ  
る。

#### 5. むすび

16世紀はいろいろの沢山の史料から寒かつたように思  
われる。従来、諏訪湖が永正4年から永正12年まで明海  
がつづいたという“当社神幸記”の記述(実は御神渡が  
なかつたと簡単に略記してあるにとどまる)や、寒暖の  
指標になるかどうか怪しい年輪解析をもとにして、16世  
紀は暖かだつたと主張している人々がある。然し、この史  
料そのものが不確かなのであつて、それだけを根拠とし  
て16世紀全体が暖かであつたと結論するのは早計である  
と思われるのである。むしろ他の多くの史料から16世紀  
はいわゆる小氷河期(little ice age)の走りにあたり、  
寒かつたとした方がよいと思われるのである。

551.509.9:551.596.1

## 汽車の音がすると雨になる\*

吉 持 昭\*\*

岡田の気象学<sup>1)</sup>に「鐘声の判きり聞えるのは雨の兆」  
というり言がみえ、ほかにも、遠くのもの音がはつきり  
聞こえると雨とか晴れとかいっている。すなわち、北海

道<sup>2)</sup>では「波音の近きは晴(寿都・久遠)、風(亀田・増  
毛)、雨(室蘭)」「物音近く聞ゆるは雨(岩内)」があり、  
愛知県<sup>3)</sup>では「西方の河瀬の能く聞ゆるは晴天なり  
(円羽郡)」「秋、川の瀬の鳴るは翌日快晴なり(宝飯  
郡)」「小春日に鐘近く聞ゆるは天気変ると云う」「庄内  
川の瀬音高く聞ゆるときは雨なり(東春井郡)」がみえ、  
飛騨高山<sup>4)</sup>では「寺の鐘の鳴りがよいと天気兆」、陸

\* If you Hear the Roar of the Train, it will  
Rain.

\*\* Akira Yoshimochi 広島地方気象台  
—1962年12月13日受理—